



「アダプテッド・スポーツ」という言葉を聞いたことはありますか？ 障害のあるなしや年齢、運動能力に関係なく楽しめるように、ルールや用具を工夫したスポーツです。こども記者まなっくの2人が、アダプテッド・スポーツを研究する北海道教育大学岩見沢校を訪れ、その魅力にふれました。

(文・写真 横田望)

アダプテッド・スポーツ だれでも

「まなっく」はまなぶんの「まな」と、「行く・聞く・書く」に由来する愛称です

こども記者 まなっく 見ぶん 録

2人は、空知管内新十津川町・新十津川小6年の石山絢菜さんと、美瑛市・東小4年の菅功太郎さん。大学の体育館でアダプテッド・スポーツ研究室准教授の大山祐太さん(37)が出むかえてくれました。

まず、大山さんから、障害をどのように考えたらいいか、説明がありました。例えば視

力。目が悪い場合、眼鏡やコンタクトレンズがあれば、多くの人が見えるようになります。「障害があるとしても、不自由に感じているところを補えば、できることが増えて、困ることが減ります」と大山さん。

この考え方を取り入れて、多くの人が楽しめるように、工夫したのがアダプテッド・スポーツです。英語の「adapt(アダプト)」に由来し、「適応させたスポーツ」という意味になります。2人は早速、パラリンピックの正式種目「ボッチャ」に挑戦しました。

ボッチャは2組に分かれ、赤青それぞれの球を投げて、目標になる白い球にどれだけ近づけられるかを競います。今回は石山さんの妹2人も交え、2人1組で勝負をしました。

みんなが投げた球は、白い球よりずいぶん手前で止まった

ボッチャを体験 いっしょに勝負 楽しい



⑤ アダプテッド・スポーツの一つ、ボッチャを楽しむ石山絢菜さん(左)と菅功太郎さん
⑥ 車いすラグビー用のがんじょうな車いすに乗って、正面からぶつかり合ってみる、まなっくの2人
⑦ 大山祐太さん(左)から、障害のことやアダプテッド・スポーツについて教わる、まなっくの2人

なかなかうまくいきません。「やった!」。ねらった所にボールが止まって、菅さんが喜びました。石山さんは「ルールが分かりやすいし、車いすの人やお年寄りともいっしょに勝負ができそう」と話します。

ボッチャは主に、脳性まひという病気のえいきょうで、体が動かしにくい人のためにできたスポーツです。ボールを投げられない人は、けつてもいいし、ランプという道具を使って転がしてもいいのです。2021年の東京パラリンピックで日本選手が初めて金メダルを取り、とても盛り上がりしました。

アダプテッド・スポーツには、車いすラグビーもふくまれます。

す。石山さんと菅さんは、選手が使う車いすに乗って、正面からぶつかり合う体験をしました。ガッツ、と大きな音がしましたが、2人がけがをすることはありません。かたい金属を使っ

てゆがんたりしないようにするなどして、安全に試合ができるような作りになっているためです。「各選手に合わせて作るので、1台170万円もするんですよ」。大山さんがそう言う

と、2人はびっくりした様子でした。

アダプテッド・スポーツの考え方にふくまれる競技はほかにあります。バレーボールの代わりに風船を使う「風船バレー」や、プラスチック製の円

ばんを投げて競う「フライングディスク」などです。大山さんは「体格や性別、体力などが自分とは異なる人という時に、どうやっていっしょにできるか考えるのがアダプテッド・スポーツ。この考え方を身近な場面で試してみてください」と伝えました。

体験を終えて、石山さんは「ドッジボールでやわらかいボールを使ってみよう」と言いました。かたいボールに当たったらい、と思っ

て参加しない友達がいても、いっしょに遊べるからです。菅さんは「どれもすごく楽しかった。アダプテッド・スポーツを知らない人に教えてあげたい」と話していました。

